第11回 7月6日の講義内容

- 口 § 4. 予備的分析
 - 作表
 - 独立性検定、相関

7/6/05

§ 4. 予備的分析(2)

- □ 独立性の検定:カイ2乗検定
 - 関係性の有無をチェック 統計手法のみからは因果関係はわからない
- □ 相関係数
 - 相関の有無、程度をみる **検定を行う場合には、帰無仮説に注意!!** H_o: r=0
 - 相関 = 二変数の線形関係の程度を表す尺度 相関係数からは非線形関係の存在は分からない

7/6/05

3

§ 4. 予備的分析

口作表

- 単純集計
- クロス集計: ex.) 分割表 平均や標準偏差など統計量を見るだけで な〈、分布の形状にも注意
 - □ Bi-modalのケース
 - ロ 歪んだ分布のケース

7/6/05

2

クロス集計の例

(上野(2004)「日本企業の多角化経営と組織構造」『組織科学』vol.37(3))

		事業数の増減			合計
		減少	維持	増加	
既存主力 事業への	縮小	6	4	3	13
投資	維持	26	44	18	88
	拡大	24	26	16	66
合計	r	56	74	37	167

7/6/05

copyright (c) 2005, Y. Takeuchi

クロス集計の例(2)

ロ 独立性の検定

$$c = \sum_{i=1}^{k} \sum_{j=1}^{l} \frac{(x_{ij} - e_{ij})^{2}}{e_{ij}}$$
$$c \xrightarrow{d} \chi^{2}((k-1) \times (l-1))$$

■ 前表のケース □ c=2.98 □ $\chi^2(4)$ の上位5%有意点は9.4877

帰無仮説(独立性)を棄却できない

7/6/05

グッドマン=クラスカルの順序連関係数

□ 順序のあるカテゴリー変数の関係性の指標 対となったデータ(x₁,y₁), (x₂,y₂) を比較すると、下表の分類 のどこかに入る。 あらゆるデータの対に対して、これを行い

あらゆるテータの対に対して、これを行い G=(#A-#B)/(#A+#B) を求める。

	$y_1 < y_2$	$y_1 = y_2$	y ₁ >y ₂
$x_1 < x_2$	Α	С	В
$X_1 = X_2$	С	С	С
$x_1 > x_2$	В	С	Α

7/6/05

相関係数の種類

□ Pearsonの積率相関係数

■ 一般に「相関係数」と呼んでいるもの

$$r = \sum_{i=1}^{n} (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y}) / \sqrt{\left(\sum_{i=1}^{n} (x_i - \bar{x})^2\right) \left(\sum_{i=1}^{n} (y_i - \bar{y})^2\right)}$$

□ Non-parametricな関係性の指標

- グッドマン = クラスカルの順序連関係数 Goodman-Kruskal Gamma
- Spearmanの順位相関係数 □ 順位変数の相関

7/6/0

6

グッドマン = クラスカルの順序連関係数(2)

ロ クロス表の例

標本数 n=167 ペアの数 13,861

#A = 2556

#B = 2516

G=(2556-2516)/(2556+2516)=0.0078

連関ナシ

7/6/05

8

2005年度 標本調査 スライド資料

【課題】サンプリング解説					
□ 7/6(水)昼現在、13名 提出			回答 者数	比率	
■ うち、3名は誤りあり ■ 有効答案10 ■ 次ページ以降にまとめ	視聴率		1,182	39.4%	
	携帯	不所持	108	3.6%	
ロ 母集団分布は右表のと		D社	1,379	46.0%	
おり		ΑŻŦ	1,149	38.3%	

V社

362 12.1%

標本視聴率 (母集団視聴率=39.4%)

視聴率	系統150	層化150	多段150	単純150	単純60
0.25	0	0	0	0	0
0.30	0	0	1	0	2
0.35	3	2	4	0	2
0.40	5	3	2	8	1
0.45	2	5	3	2	3
0.50	0	0	0	0	2

7/6/05